

菊 月 少し氣懸りな空模様も、程なく拭ひ去られて、今年も戦時下の豊作を約束された様に、日増しに稻の穂先が頭を下げて来る。夜目にも白くほのかに咲く秋草の花は、夜露に鳴く虫の音と共に、仲秋の明月を更に美的にする。

1939年

9月の天象

恒星界 依然中天に、白い銀河の流れと共に、北から、カシオペア、セフェウス、白鳥、琴、狐、鷲、蛇遺ひ、射手等が懸つて居る。然し夜も少し更けると次第に其等の星も西へ傾き、月末にもなれば、アンドロメダ、ペガソス、魚、水瓶は東に高く、ベルセウス、羊、三角、鯨等、秋の星座も昇つて来る。其れに引きかへて、北斗や牧夫、冠、蝸等は、西天低く若しくは沈んでしまつて、秋の色は夜空にも濃い。蚊に惱まされた夏季の観測から開放されて、露が一寸ヒヤリとする秋口は格別に好い。

景氣添への火星と木星が東西に、赤青の巨光を放つて居る。

太陽 “獅子”座の中部より“乙女”座西部に移る。略表にすれば

日付	赤緯	赤緯	晝間	夜間	夕刻薄明終焉時刻
月 日	時 分 秒	度 分	時間 分	時間 分	時 分
9 1	10 37 23	+ 8 2	12 57	11 3	19 55
6	10 55 29	+ 6 52	12 46	11 14	19 47
11	11 9 54	+ 5 0	12 35	11 25	19 39
16	11 31 28	+ 3 5	12 25	11 35	19 32
21	11 49 24	+ 1 9	12 14	11 46	19 21
26	12 7 22	- 0 48	12 4	11 56	19 17
30	12 21 47	- 2 21	11 54	12 6	19 11

月初めは残暑の厳しいのが例である。ぐんぐんと太陽は南へ進んで、下旬遂に赤道を横切る。この頃にはもう一寸朝方寒い様な日も来る。満洲や北海道には初霜さへ見る様になる。日一日と秋の色が身に迫つて感じられる。

月 “魚”座に始まり、一週して再び魚座に入る。其の間28日は仲秋の明月がある。今の天文學には別段問題になる事ではないが、一見フザけた様な“月々に月見る月は多けれど、月見る月は此の月の月”と云はれる内にも、何か人間としての美的な感に附合し得る特殊なものがある事も否定出来ない。例に

依つて諸相を略示すれば

日付	月齡(21 ^h)	時刻	視直徑(21 ^h)	星座	記事
9 ^月 7 ^日	23.3	5	30.59(6日) <small>分秒</small>	牛	下弦
13	0.0	3	33.22	六分儀	最近
13	0.0	20	33.22	獅子	新月
20	7.0	20	30.33	蛇遣ひ	上弦
25	12.0	18	29.27	水瓶	最遠
28	15.0	23	29.38	魚	満月(仲秋名月)

水星 曉天の星。月初めは可なり見易いが、以後次第に太陽に近接する。22日には遂に外合。以後夕空に移るが観望困難。

金星 5日遂に外合する。以後久方振りに夕方の星に移るが、未だ一寸見る事は出来ない。

火星 やゝ遠くなつたが、依然観測期間中である。先月24日停留になり目下順行中だが、ユツクリと“射手”座の東部から、“山羊”座へ向つて居る。光度は $-1.8 \sim -1.0$ へと減少するが、未だシリウス位の光であるし、視直徑も $20''.1 \sim 15''.3$ へと減少するとは云へ、肉眼的にも望遠鏡的にも、充分興味の中心となり得る。今日を過ぎると、更に遠くなる一方、内地ではシーイングも悪化する日が多くなるから、今日中に観測すべきを観測して置かないと、又二年近く待たねばならない。

木星 代つて“巨人”木星が悠々登場。27日には對衝となる。位置は云はずと知れた東天に怪光を放つ星がそれ!! (魚座中部) 光度は $-2.4 \sim -2.5$ 、視直徑は $45''.3 \sim 46''.5$ と最大値に達した。この星の帯は、火星の模様よりも遙かに見易く、5 cm の器械で3~4本は見へるのが通例である。

土星 夜半には、あの美しい環の中に座つて、東天高く昇つて來た。火星を送り、木星が丁度對衝、次は土星が控へて居る。この所、今夏から秋へ、大小を問はず望遠鏡所持者には豪華版の連続ヒットである。光度は $+0.4 \sim +0.3$ 、視直徑は $17''.2 \sim 17''.8$ 、輪の傾きは 15° 餘り、益々美しい。

天王星 夜半東に昇る。“すばる”の西南5度の邊を、徐々に逆行中。

海王星 16日太陽と會合、全く見られない。ユリウス日 9月1日21時が2429508.0に當る。(7月、8月共に+20.0日と訂正)